

原発災害 「復興」の影

■今を問う②

「福島に生まれなければよかった」。保原高教諭の番匠あつみ(41)は、原発事故後間もないころに生徒から言われた言葉を覚えていた。放射線への不安は避難者に焦点が当てられがちだが、避難しなかった子どもたちも内向きになりやすい。なごみに見えない影響が出ている。番匠は事故から3年以上たっても、さまざまな機会にそれを感じる。

番匠は、環境省が15日に感じるようになった」ともマスクを外さない」

福島市で開いた同市など番匠の目には映る。メールや無料通信アプリ・LINEの意見交換会に出席。放射線が教育現場に与えているE(ライク)などのやり取りが多くなり、生徒間の影響などを説明し、子どもが社会で積極的に関わることの重要性を指摘した。

事故後の習慣で、マスクただ、高校教育課主幹の瓜

被災後強まる「内向き」 関わり避ける子どもたち

事故後は、大人が子どもを手放せない子どももいる。小中学校では一時、通

学の際などにマスク着用など指導すればいかと心



生徒も心。先生に取る影響も大きい。スマートフォンを手に取る生徒も不安に陥る。スマートフォンを手に取る影響も大きい。生徒も心。先生に取る影響も大きい。

美術部の生徒と一緒に設置宅などの壁に絵を活動が続いている。番匠の周りでは、事故後願う。「社会と関わり、4年目を迎え、放射線の話

自信や誇りを深めてい(文中敬称略)